

『食の終焉』 ポール・ロバーツ 著、神保哲生 訳・解説 ダイヤモンド社、2012年

プロローグ(p15~p41)

- ・食経済が抱える矛盾 (p18)
- ・破綻の兆候 (p24)
- ・限界を迎える食料生産能力 (p28)
- ・航路なき食の未来 (p32)
- ・本書について (p37)

◇ 用語について

- ・食糧と食料 (food)

本書の翻訳においては、原則「食料」を用い、文脈上明らかに「食糧」と判断される、または慣用句的に使用される場合のみ「食糧」を用いる。

- ・食システム (food system)

食料(食糧)の「生産」「流通」「消費」の各段階を、相互に影響し合いながら一つのシステムを構築しているとする考え方。

- ・食経済 (food economy)

著者の考え方に従い、食そのものを他の経済活動と区別するために「食経済」の用語を用いる。

◇ 冒頭部 (プロローグにおけるはじめとして)

【要点】 今日のアメリカでは、食品業界自体が、食の安全が制御不能な状態であることを認め始めた。

食の安全の問題は、業界の管理能力どころか、事態を把握する能力を超えようとしている。

【理由】 ・2006年、袋詰めホウレンソウから0157が検出されたことをはじめとした、アメリカにおける一連の食品汚染の問題の広がり。

・アメリカが輸入している食品のうち、政府が検査できているのは2%未満という事実。

- ・食経済が抱える矛盾 (p18)

【要点】 食システムがほかの経済部門と同じように進化してきたとはいえ、食そのものは基本的には経済現象ではなく、現代の工業製品のように決まりきった枠の中に収めていいものとは限らない。

【理由】 ・食料は大量生産に適していないため、品種改良を施したり、添加物を加えるようになった。

・調理の場が家庭から工場に移行したため、家事から解放された反面、食べ物を自ら選べなくなった。

【課題】 食料生産を担う農業が効率化の波にのみ込まれ、農業の工業化が起こっている。

- ・破綻の兆候 (p24)

【要点】 飢餓や食中毒や栄養に起因する健康問題もさることながら、急激な社会の変化を伴って築き上げられた現代の食システムは、破綻の兆候の中でも根が深く、定量化が難しい。

【理由】 ・「食品の経済学的な価値」と「生物学的な価値」にズレがある。

・現代の食システムでは、食べ物があふれる反面、飢えの根絶には近づいていない。

【課題】 食で経済効率を突き詰めることは、個食や調理の単純化など、食システムを破綻に向かわせている。

- ・限界を迎える食料生産能力 (p28)

【要点】 過剰生産を義務付けられた現代の食システムは、すでに生産能力の限界に達している。

【理由】 ・肉食文化の広がり。・バイオ燃料の普及。

・化学物質の過剰な使用。など

【課題】 水やエネルギーをめぐる国際的緊張が、食経済に新たな限界を示している。

・ 航図なき食の未来 (p32)

【要点】 食経済の危機は、他の産業とは異なる重要な問題をはらんでいるが、現代の食システムに代わる次のシステムが用意されているわけではない。

【理由】 現代の食料生産はグローバルな枠組みで行われている。

・ 食経済は急激な変化に対応できない。

【展望】 社会のあちこちで、人間にとって重要なものとして食料が再び見直されつつある。

・ 本書について (p37)

【概要】 本書ではグローバルかつ多様な視点で食経済の現状を取り上げるとともに、食の歴史を考察し、現代の食経済に影響を持つ有識者の意見も取り入れている。

【構成】 第一部では、食システムの起源と実情を探る。

・ 第二部では、食料生産の影響について考察する。

・ 第三部では、現代の食システムのあり方を変えようとする新しい試み取材する。

【目的】 現代の食経済の実態とその課題、また、持続的な変化のための選択肢を消費者に知ってもらう。

第 I 部 食システムの起源と発達

第1章 豊かさの飽くなき追求(p45～p82)

・ 食の起源 (p48)

・ 農業と文明の始まり (p54)

・ マルサスの予言 (p57)

・ 人口増加と食のグローバリズム (p66)

・ 化学肥料の登場 (p69)

・ アグリカルチャーからアグリビジネスへ (p72)

・ 食料生産の近代化が変える社会 (p75)

・ 勝利の代償 (p78)

◇ 冒頭部 (第1章におけるはじめとして)

【要点】 新たな成長因子であるテトラサイクリンによる「食肉革命」を例とし、現生人類の食生活をさかのぼり、近代までの食経済史の流れに注目することに言及。

・ 食の起源 (p48)

【要点】 人類は草食から肉食に移ることで、進化を達成した。

・ 特に、脳の発達に肉食は適していた。

【理由】 肉はカロリーが高いことに加え、肉(体)の材料に適している。

・ 肉食は草食に比べ、消化にかかる負担が少なく、消化器官が縮小した。

【課題】 人類の祖先の食料は自然が与えてくれるものであったことが、人類を農耕民へと向かわせる。

・ 農業と文明の始まり (p54)

【要点】 人類は食用植物に注目することで農業革命を達成した。

・ 食の変化(穀物の加工)は、人類を小型化したが人口の増加を促した。

・ 農耕による集中的な食料生産は文明をもたらした。

【理由】 離乳食が出産の間隔を4年から2年に短縮した。

・ 農耕は狭い土地で多くの人口を養えるため、人口密度が高まった。

【課題】 農耕の発展によって産み出された余剰生産物は、今日の人類が抱える様々な問題の発端となった。

・マルサスの予言 (p57)

【要点】・1798年、トマス・マルサスは「人類が破滅する運命にある」という悲観的な予想をした。

・マルサスはこの世から飢えがなくなることはないと考えた。

【理由】・食料供給を増やすとその分人口が増える。

・増えた人口は常に食料供給量を上回る。

・貧困（飢餓）が再び次の生産性増加を誘発する。

【結論】一万二千年に及ぶ文明と進化の歴史を経て19世紀の人類が行き着いた先は、発育不良の肉体と短い寿命、そして飢饉による大規模な人口の減少だった。

・人口増加と食のグローバリズム (p66)

【要点】・マルサスの示した限界を乗り越えたのは国際的（グローバル）な食料流通システムの出現。

・ヨーロッパの需要拡大が地球上のあらゆる場所での食料生産を促進。

【理由】・アメリカの農民は急速に生産性を向上させた。

・アメリカに加え南米とオーストラリアからの余剰分もヨーロッパに流れた。

【課題】人類が真にマルサスを打ち負かすには、議会の介入や法律の整備、化学分野の躍進などの新しい方法が必要となった。

・化学肥料の登場 (p69)

【要点】アメリカの食料生産システムの革命は、作物の交配技術と化学肥料の発明による。

【理由】・空気中の窒素をアンモニアで固定するハーバーボッシュ法が食料生産の転換点になった。

・1950年以降に生産された食物の約半分は、合成窒素の供給がもたらした

【結論】実際に穀物生産の爆発的増加を可能にしたのは化学肥料だった。

・アグリカルチャーからアグリビジネスへ (p72)

【要点】農業用原材料に革命をもたらした科学は、その影響を生産にも及ぼすようになり、農業の合理化が進んだが、他業種への依存度が高まることになった。

【理由】・均一性は植物育種と農業の産業化における基本理念になった。

・農場主は作物や家畜を一種に限定し、飼料などを他所から購入することが推奨された。

【結論】農業機能のアウトソーシング化によって、食システム全体の効率は飛躍的に向上し、農業を意味する「アグリカルチャー」を、現実と合致した「アグリビジネス」に変えることが提案された。

・食料生産の近代化が変える社会 (p75)

【要点】統一化、合理化、集約化を遂げた新しい食システム（「アグリビジネス」）は、社会に大きな変化をもたらした。

【理由】・人間の強い肉体や臓器を獲得することで、寿命を延ばし、体格を発達させた。

・食費が下がることで、ほかのことに使えるお金が増えた。

【課題】合理的な事業へと発展した農業による新たなシステムのリーダーは、アメリカ合衆国だった。

・勝利の代償 (p78)

【要点】繁栄を享受しながらも、現代の食経済は矛盾に満ちており、システムが制御不能な状態に陥っているという認識が広がり始めた。

【理由】・生産の融通が利かない農業は、トレッドミル現象から抜け出せない。

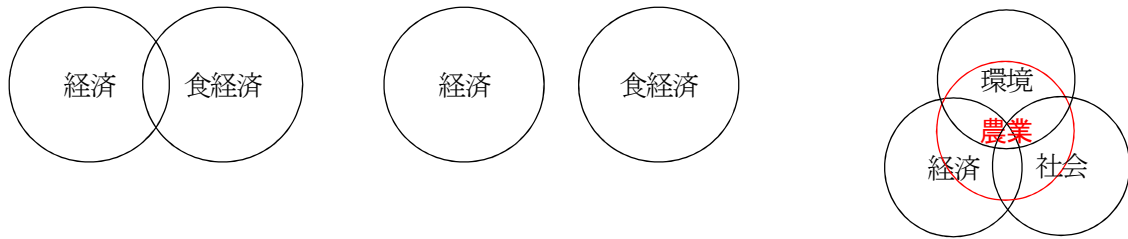
・食経済は利益を保てるだけの規模を持つ巨大企業に委ねられるようになった。

【課題】何世紀もかけて、人類を食料不足から救う食経済を築き上げた私たちは、何十年にもわたってその勝利の代償を支払うことになった。

◆ 用語について

・食経済（food economy）を他の経済活動と区別することへの問い。

① 食経済は他の経済活動とどの程度区別されているのか。（一部は重なるのか、全く重ならないのか）



◆ これまでの世農研勉強会における議論との関連性について

・共通事項の確認

② 食はグローバル化の影響を受けている。（P20、P66）

③ 農業は工業化している。（P22、P72）

④ アメリカの農業補助金制度が、世界の食システムを破壊している。（P34）

⑤ 肉食の拡大と農業の関連性。（P51、P67、P75）

⑥ 品種改良と化学肥料に依存した農業革命。（P69、P74）

・本書（プロローグと第1章より）の独自性

⑦ 人類の歴史を経済史（食経済史）の視点から分析していること。（P37、P48）